

渋谷のタワレコでお気に入りのアーティストのCDを五枚ほど買って、外に出た。十二月の午後五時。日は落ちて、街並みはだんだんと暗闇に染まり始めていた。

「さむ」

ただでさえ今日は気温が低いのに、暖房が効いた店内から出たことにより、体感気温はさらに低い。学校帰りに渋谷に寄ったので、制服……特に腰から下はとてつもなく寒い。首元に巻いたバーバリーのマフラーを、口元まで引き上げる。これで少しだけ、寒さは和らいだ。

私は耳の穴にイヤホンをつっ込んで、ポータブル・オーディオ・プレイヤーの電源を入れる。イヤホン流れてくる音楽に耳を傾ける。耳触りのよいJPOP。数年前から売れ出したロックバンドの、一年前のアルバムだ。最近、私はこの曲を通学のお供にしている。最新アルバムではなく、一年前のアルバム。ちょうど耳に馴染んで来て、意識を曲に向けることが出来るようになってきたから。通学中は、雑多な人々の姿が意識に入ってきて来ないように、意識を内側に向ける事が多い。この世界は雑音が多い、と思う。

タワレコから道玄坂の方に向かうために歩き出す。渋谷に

来た用事はすべて終えているけれど、なんとなくくまっすぐ家に帰る気にはなれなかった。学校生活にストレスが溜まっていたからかもしれない。勉強疲れ。学生は勉強が本分だ、という人も居るけれど、やっぱり勉強は疲れる。ぶらぶらと、渋谷の街を歩くことにした。

人波に流されるように、渋谷の街を進む。師走ということもあってか、渋谷の街は人ごみでごった返していた。渋谷に来るたびに思うんだけど、どうして渋谷はこんなに人が多いんだろう。厚手のコート、マフラーといった防寒具を完全装備した人たちが、足早に歩いていく。黒や灰色といった暗い色の服を着ている人が多いので、人波の色はくすんで見えた。そんな中で、私が持つタワレコの黄色い袋がふらふらと揺れる。

ふと、人ごみの向こう側、反対の歩道に、見覚えのある顔を見つけた。

「あ」

思わず、声が漏れた。

その人は少しだけ俯きながら、渋谷駅に向かって、道玄坂を重い足取りで降りていた。黒いコート。垣間見えた足元は

革靴とスーツ。黒い髪は少しだけ癖っ毛で、特に手入れがされてる訳ではなく、伸ばしっぱなしになってる。

全身から冴えない感じが漂う、二十代のサラリーマン。だけど、私はこの人を知っている。よく、知っている。

会うのは何年ぶりだろう。服装は当時と違うし、顔はこの距離じゃよく見えないけれど、私はあの人が誰か分かる。

忘れるわけがない。

私の心の奥の奥に閉じ込めていた、感情が緩やかに解かれていく。それは、永い間、ずっとずっと密かに記述していたものだ。

「待って」

彼を追いかけるために、踵を返す。突然反転して走り出した私を、邪魔そうな目つきで人々は睨む。舌打ちすら聴こえる。でも、そんなものに気にしない。

彼と私を物理的に隔てているのは、無数の人々によって形成されている人波。ただ、それよりも、時間という透明な境界線が、私と彼を決定的なまでに隔絶している。目の前に、大きな溝を幻視してしまいうくらいに。

数年という隔たれた時間を、飛び越えなければいけない。

タワレコの黄色いビニル袋が誰かに当たるのも気にせず、急いで彼の元に向かう。もう二度と、隔たりが発生することがないように。

JR渋谷駅に到達するための最後の交差点で、彼は立ち止まった。ちょうど信号が赤に変わっていた。私は彼の腕を思い切り掴んだ。

「勝矢先生っ！」

彼はゆっくりと振り返った後、私の姿を認めて、瞳を大きく開けた。

「こ、香坂さん？」

天童勝矢先生は、私が小学生のとき、家庭教師をしてくれていた。当時大学生で、理学部に通っていたと思う。

お母さんの知り合いのツテだったらしく、初めて家に来たときは、私より向こうの方がガチガチに緊張しているのが小学生の私にも分かった。後から分かったことだけど、勝矢先生が通っていた大学の理学部には女性の学生がほとんど居なく、勝矢先生自身もオクテでお母さん以外の女性と喋ったこともそんなにないらしい。小学生のころに、そんな機微は分